

50年に一度のイベントを楽しもう 第35回日本診療放射線技師学会に向けて

公益社団法人埼玉県診療放射線技師会
会長 田中 宏



2016年夏、関東地域で2019年度の日本診療放射線技師学会（以下、全国大会）をどこで開催するかについて、日本診療放射線技師会（以下JART）の会議で話し合われた。

全国大会の主催はJART、実施は都道府県技師会であり、第1回は茨城県から始まった。以前から、その矛先は「埼玉で」という話が持ち上がっていたが、埼玉案が浮上しては消えを何度も繰り返していた。そのたびに丁重にお断りをしていたのであるが、JARTからは「2019年は北関東で」という話があり、周囲の埼玉への期待は高くなった。理事や委員に相談をしたところ、委員からは「どうせ、やるなら自分たちから引き受けましょう！自分たちが現役の間に埼玉で全国大会をやることはないですよ。50年に一度のイベントを楽しみましょう！」と盛り上がり、引き受けることになった。

私は、そのような理事や委員を誇りに思う。

しかし、実際に準備を始めてみると、関東甲信越の学会大会とは規模が違うことに戸惑うことばかりであった。予算規模・演題の数・依頼状や委嘱状の数など、通常はイベント会社と委託契約を結び、業務委託するのが通例であるが、全国大会規模となると1,000万円以上かかるのが普通である。しかし、今大会は予算が厳しく、理事や実行委員が自らHP

作成・演題受付・仕分けなど、事務的な作業を行うことで、何とか経費削減に努めている。これまで、当会の事業で培った技術や経験を持った優秀な役員のおかげといえる。

今大会の企画内容は、全国の会員皆さまに楽しんでいただけるように、埼玉カラーが十分に出されている。診療放射線技師の業務は、装置の安全管理・放射線の管理・画像情報管理・検査・読影（の補助）・検査の相談がある。1999年より始めた埼玉独自の認定講習会は、これらの知識が習得できるようカリキュラムが組まれている。「技師の教育は技師が行う」という本会の方針の下、これまでに優秀な技師が多く育ってきた。埼玉の会員が今大会で講師を務めていることは、この教育システムを構築した諸先輩方の功績にほかならない。

最後に、特別講演・教育講演の一部を紹介したい。

診療放射線技師の間でも話題で持ちきりのドラマ「ラジエーションハウス」の原作監修の五月女康作先生による市民公開講座を予定している。医師・看護師以外のコメディカルが主人公になるドラマとしては初である。ドラマ化までの道のりは簡単ではなく、16年前の五月女康作先生の行動がなかったら、今日のドラマはなかったと確信できる。

「奇跡は偶然には起きない」ということを教えてくれる講演になるであろう。